異世界・メディオ

タイヨウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界・メデイオン

【Nコード】

N8833D

【作者名】

タイヨウ

【あらすじ】

普段どりの生活を送っていた蒲柳隆二^{はむりゅうたけし}は、いきなり見知らぬ世界に召還された。現実世界と異世界で繰り広げられる、笑いあり、シリアスあり、のお話です。

プロローグ(前書き)

ご感想を、ぜひお願いします。

プロローグ

プロローグ (雄二視点)

「ふあゝあ」

大あくびをしながらベッドから、這い出ている俺。

(全く、何でこんな早く起きなきゃならねんだよ)

俺は、心の中で文句を言いながら、制服に袖を通し始める。

今の時刻は、6:26分。学校に向かうには、早すぎる時間だ。

なぜ、俺がこんなに早いのかは、この話を読み続ければ分かることだ。

あのおう・・・そろそろ自己紹介のほうを・・・。

「?」

頭の中で、変な声が聞こえた気がしたが・・・。まあ、いいや。その言葉に従おう。

俺の名前は、蒲柳^{ほりゅう} 雄二^{ゆうじ}、ただいま高校2年生で、この話の、主人公と

また面倒な役回りだ。俺は、窓を開けてベランダに出る。

「お〜い、芳紀ほしき」

俺がそう声をかけたが、返事は無い。

「しょうがねえな・・・」

そうつぶやいて、俺は向かいのベランダに向かって思い切り跳んだ。その幅、3Mほど、俺は

屋根に、手をかけてそのまま、着地。審査員がいたら、間違いなく10点満点を出すだろう。

ゆっくり立ち上がって、窓に手をかける。

窓はいつも通り、鍵は開けられていて、すんなり開いた。

(一応、ここ女の部屋だよな・・・)

そういつて、無防備な奴の部屋へ侵入する。なぜなら、あいつを起こすためだ。

ベッドの上を見たがそこに、芳紀の姿は無かった。

「もう、起きたのか？」

俺が探しているのは、幼馴染こりょうの湖陵 芳紀朝ほしき、起こすのは、俺の毎日の

日課になっている。

適当に目星をつけて、階段を降りる。

リビングに行くとき、芳紀の母、湖陵こりょう、香里かおりが、ゆったりと何かを飲んでい

た。

「おはようございます。香里さん」

そう、声をかけると香里は、のったりと振り向いて柔らかい笑顔をつくると、

「おはよう、ユージくん」

と間延びした声で、あいさつを返してきた。リビングを見渡すが、そこにも、芳紀の姿は無か

った。

「香里さん、芳紀知りませんか？上にいなかったんですけど」

「え、降りてきてないわよ」

そういって、首をかしげている香里さん。

なぜ、俺が香里さんと呼ぶのかは、後々話すとしよう。

「分かりました。もう一回、上、探してみます」

そういって、また階段を上がる。後ろから、

「頼んだわねえ」

と声がして、俺はまた芳紀の部屋に入った。部屋の時計を見ると、もうすぐ7:00、

(やばいな)

そう思って、もう一度部屋を見渡す。

(やっぱり、いないよなあ)

心でつぶやいて、もう一度ベッドの上を見直す、布団に触れるとまだ温かった。

(まだ遠くへは行ってないか)

そう推測して、ベッドに腰をかけた。

「う、うん」

「？」

今、芳紀の声がした。どこからだ？辺りを見回すが、芳紀の姿は見当たらない。

おかしい……。もう一度、座りなおす。

「うん」

また聞こえた。俺はその声のした方に、目を向けた。

「まさか・・・」

俺は、ベッドと壁の隙間を覗き込んだ。

「はあ〜」

大きなため息をついて、そこにいる人をベッドの上に引き上げる。

「あ〜ん」

まだ、眠っている。なんなんだ、この人の精神力は・・・。

たった今、発見されたこの人が、幼馴染の芳紀だ。

俺は、冷えた目でそいつの寝顔を見て、

「おい、朝だぞ。起きろ〜」

と軽く肩をゆすった。反応なし・・・。

「起きろ、遅刻するぞ〜」

今度はもう少し強く。

「う〜ん、あと5分〜」

この人の5分は、1時間に相当する。俺はそれにめげず、今度は顔の頬を引っ張った。

「お〜き〜る〜」

だんだんと強くしていく、しかしよく伸びるなあ。

手を離すとゼリーのようには震えながら元に戻った。今度は、無視を決めやがった。

（実力行使に出ても、いいですかねえ）

俺の良心を確認をとる、いつものことだ。良心が大きな丸を手で作って笑顔を見せた。

俺は助走をつけて、芳紀の腹に狙いを定める。

「起きろっつてんだろ。コラー！！」

そのまま、とび蹴りをかます。

「うぐっ」

（決まりましたよ、見事に）

芳紀は、腹を痛そうにかかえている。これが、俺のいつもの日常だ。

プロローグ（後書き）

どうでしょう、楽しんでいただけましたか？次の話もぜひ読んでください。

朝の日常

朝の出来事 (雄二視点)

俺は苦しむ芳紀を、満足気な表情で見下していた。

(あゝ、スッキリした)

「目え覚めたか。芳紀？」

その声をかけると、芳紀はゆっくりと起き上がり冷たい目で俺をにらんできた。

「起きたんなら、俺は家に戻るからな」

俺は、急いでその場を去ろうとした。芳紀の怒りが俺に向けられる前に……。

ドアノブに手をかけようとしたその時、いきなり、俺の首に手が回って、絞まり始めた。

「ちよっ、待て、芳紀。俺は起こしたただけだろ」

がんばって、逃れるための言葉をさがす。

「だからって、とび蹴りはないんじゃないかなあ？」

その言葉には少し殺気が混ざっている。

(こゝ、殺される)

「ギブ、ギブ。悪かったって」

俺は必死に謝ることに専念した。しかし、

「まだ、そんなにしゃべる元気があるなら。まだいけるね。あと10秒逝ってみよう」

「おいつ、今、字が違ったぞ!!」

そんな言葉に、芳紀は耳を傾けず、数を数え始めた。

「1、2、3、4、5、6、7、」

必死に耐える俺。だんだんと強くなっていく腕。

「8、9、8、7、6、5、」

「おいつ、終われよ!」

そついう俺も必死だ。

「6、7、8、9、」

(よしっ、耐え切った)

と心の中でガッツポーズをした時、ドアが開き、

「もっ、いつまで、寝てるの」

と間延びした声が、響いた。

「おはよう、母さん」

「あら、起きてたの？」

香里さん、この状況を見て言うことはそれだけですか……。

「朝から、夫婦喧嘩もいいけど、遅刻するわよ」

「夫婦じゃない！」

俺と、芳紀は同時に否定した。その間も、芳紀の攻撃はやまない。

「まあ、確かに遅刻しそうね」

芳紀にそういわれ、時計に目をやると、7:30、かなりやばい。

「早くしたくしなさい」

俺には、香里さんが神に見えた。その時だけ。

「そうね。じゃあ、ラスト5秒」

「おいっ」

増えましたよ、芳紀さん……。

「1、2、3、」

俺はまた、必死に耐える。香里さんは、

「早くしなさいよ」

と言いついて下りてしまった。

「はい。4、5」

(終わった)

「6、」

「ッ!」

なんと、信じられないことに最後に芳紀は俺の意識を刈ったのだ。

俺はそのまま、その場に倒れこんだ。

このあと、学校に遅刻し、こっぴどく絞られたのは、言うまでもない。

朝の日常（後書き）

作：いやあ、結構、はちゃけちゃってるよな。

芳：だってよ。雄二。

雄：……。 （気絶中）

作：あらら。

芳：あー、だめだねえ。雄二は。じゃあ、私は学校行

くわ。じゃあね。

作：いってらっさい。まあ、次には目が覚めるでし

よ。がんばってね。

雄：……。

ラウンド・ワン

ラウンド・ワン (雄二視点)

「あー、眠・・・」

「ハハハ、朝から元気ないね」雄二

元気ははつらつな笑顔を俺に向けているのは、今日の遅刻の原因だ。

「お前よく俺に向かってそんな事言えるな・・・」

俺は机の上につぶれながら芳紀をにらんだ。

「あんなことで、氣い失うなんて鍛え方足りないんじゃないの?」

(あんなことだと!)

心の中で盛大な突込みをしながら、表情は冷静さをキープ。

そのまま無視すると、芳紀はわざとらしく、

「あれ〜耳まで悪くなっちゃったのかなあ。雄二君?」

と俺の頭を軽く叩き始めた。

(ピキッ)

「お前、調子に乗るなよ・・・」

俺が殺意をこめて、つぶやく。

「えゝ何かなあ、何か聞こえたような」

(ブチッ)

叩く強さはだんだんと強くなっていき、怒りがたまってきた。

「おまえなあ・・・」

爆発寸前の怒りを押さえつけながら、芳紀ににらみを利かして、起き上がる。

すると、不意に芳紀の手が軽く頭の上に乗る、

「悪かったよ。あやまる」

と真面目な顔をして言ってきた。急な変化に戸惑いながら、

「分かりやあ、いいけどよ」

と返すと、

「バーカ、自惚れんな。嘘だよ！」

と芳紀は、デコピンをかましはじめた。

(ブチッ!!)

「調子のんなあー!!!」

そんな、かけ声とともに右ジャブを繰り出す俺。芳紀は余裕でそれをかわすと、

「騙されるほうが悪いんだよ」

と少し舌を見せて笑った。

「うるせえ！この怪物女!!!」

そういうと、芳紀の笑顔は凍り、バキボキと指を鳴らし始めた。

「どうやら、死にたいみたいだねえ」

「お前が始めたんだろ」

「朝から、夫婦喧嘩なんて元気だねえ」

「誰が夫婦だ!!!」

そんなボケを言うのが白鷗はくおう 鳴戸なると顔はいいほうで、女子には結構な人気

だ。のほほんとした性格で俺達の歯止め役である。

「でも、息もぴったりで夫婦にしか見えないよ」

「うるせえ！何が悲しくてこんな女なんかと」

「あつ、言ったね！あんたにやここで死んでもらうよ」

どちらかと言うと、あおっているようにしか見えないが……。

「おっしやあ、やってやるつじやねえか！」

「おい、おまえら」

その声に、振り返ると桂木かづらぎ 青砥先生あおぞとがタバコをくわえて入り口に立つ

ていた。教員が生徒の前でタバコ吸っていいのか？

「もう授業時間、始まつてるんだけど」

その言葉に、時計に目を向けると、とつくに授業時間は過ぎていた。

「もうちょい待って、カツツー。すぐ終わるから」

「ハッ、そんなすぐには終わらせねえよ」

ちなみに、芳紀は雄二よりむちゃくちゃ強い。

桂木はガタガタと机を動かし、スペースを空けている生徒を見てため息をつき、

「さつさと、終わらせるよ……」

とつぶやいた。止めましょうよ……。

ラウンドワン・ファイ!

勝負は始まった。

ラウンド・ワン(後書き)

作：はあ、だめだねえ。雄二。

雄：・・・うるせえな。

白：まあ、いつものことだからね。

桂：そのとおり。

雄：なあ、主人公がこんな扱いでいいのか？

芳：まあ、いいんじゃない。

作：だよねえ。

雄：なんか、やだなあ・・・。

白衣の魔女？！

驚愕な出来事 (雄二視点)

「あゝ」

俺は今、保健室のベッドで療養中だ。結果からいましょう……。

おもくそ、ぼこられました。あんなに早く瞬殺されるとは……。

あやつ、また腕をあげおつた……。

「起きた？」

カーテンの隙間から顔を覗かせている、保倉^{ほくわい} 嘉穂^{かほ}性別 女。

保健室は彼女のテリトリーである。と言われている。

「はい、ありがとうございます」

俺はベッドから降りて立ち上がりながら丁寧に答えた。

「無茶するのもいいけど、あんまりここには来ないようにね」

そういつている保倉さんの手にあるのは……注射器！！何に使うんすか……。

「は、はあ」

先生の手を見ながら答えると、それに気づいたのか、

「これ？」

と俺に注射器を向けてきた。俺はそれをかわしてうなずく。

「フフツ、色々を使うのよ」

そういつて不適な笑みを俺に向ける保倉さん。

(ま、魔女・・・)

彼女の二つ名を今頃になって思い出した。

「保健室の白い魔女」その言葉がぴったりの笑みだった。

「あ、ありがとうございます。失礼します」

逃げるように部屋を退室しようとする、彼女は最後に、

「まあ、今度は勝てるようにがんばってね」

と声をかけてきた。

(その言葉、ありがたく受け取っておきます)

軽く会釈をして、心の中で礼を言つと扉をゆっくり静かに閉めた。

(適当にフケるか)

そう決めて教室じゃなく屋上に向かって歩き出した。

白衣の魔女?! (後書き)

遅くなりました。

まだまだ、がんばりたいと思いますので、どしどし感想お願いします。

召喚か?!

目をあけると、そこは森だった (雄二視点)

俺ごと、蒲柳 雄二は今、絶賛さぼり中だ。

「あー、あつたけえ」

太陽の日差しを一身に受け、気持ちよく横になっている。

「気持ちいいなあ」

うとうととまどろんでいると、

「す……せ……きこえ……」

「?」

なんか聞こえたような。

「すい……せ、きこえ……」

「誰だ?」

起き上がって、周りを見る。しかし、誰の姿も見当たらない。

「何だ?」

「すみませ……きこえま……か?」

やっぱり聞こえた。どこからだ？

「助けて下さい！！」

「！！」

その言葉とともに、俺の視界が真っ白になった。

「は？」

ドサッ

「イテッ」

強く頭を打って落ちた。そして、このまま俺は記憶喪失に……

なるわけないし……

「なんなんだよ……」

そっぴいながら目をあけると、そこは森の真ん中だった。

「なんでだあ！！」

ここはどこ？ (雄二視点)

「どっこだよ！！」

俺は、つぶやきながら周りを見た。

辺りは見たこともない木々がうつそうと生えていた。

「俺、学校にいたよな」

立ち上がってみて、周りには木しか見えない。ゆっくりと適当に歩き始める。

「マジ、どこどこだよ」

茂みをかき分けると、目の前に足が出てきた。

「おわっ」

驚いて思わずしりもちをついてしまった。

自分の事ながら情けない。

おそろおそろもう一度顔を覗かせると、そこにはえらく美人な人が立っていた。

（きれいな人だなあ）

その女性も、ジッと俺のことを見ていた。見つめあう二人……。

（イヤイヤ、そっちには行かないから……）

モノローグに突っ込むな！

どつちやら、さっきからの声はこの作品の作者のようだ。

(いいのか？作者がしゃべって・・・)

いいの、いいの。

(そんなふざけた作者はほっといて・・・)

ほっとくなよ・・・。

その美女は俺の顔から、眼を離そうとしない。

「あ・・・」

痺れを切らして、声をかけると、その人は驚いたように目を見開き、俺の顔をまじまじと見て、

「私のこと、見えるの？」

とわけの分からない事を言い始めた。

いや、いきなり変なところに来ちまった時点で、もうわけが分からないが・・・。

「まあ、見えるって言えば、見えますけど」

あいまいに答えて、茂みから出て立ち上がった。

立ち上がると以外にその女の人は意外に小さくて驚いた。

まだジツと見ている彼女を見下ろしていると、

「あなた、何者？」

と問いはじめた。

(何、言ってんだ？この子)

内心、冷や汗をかきながら考えていると、

「あなた、ちょっと来て」

「うわっと」

すごい力で引っ張られていく。

(何で、俺はこんなに不運なんだろう・・・)

神に嘆きを請いながら引きずられていく俺だった。

召喚か?! (後書き)

かなり、遅くなりました
こんごもよろしくお願ひします

お茶会？

拾い物 (?????)

(またすごい物、拾ってきちゃったなあ)

私の小屋で、出したお茶を目の前ですっっている男の子。
さつきからきよるきよると部屋をみている。

(でも、私が見えるって事は力はあるのよね)

内心信じられなかったが、一応、話は通じている。

「あの・・・なんで、俺、連れてこられたんですか？」

カツアゲされる生徒のようなことを言い出した。

「あ、えっと、そういえば自己紹介まだだったんだよね」

私は、あわてて立ち上がった。

「私は、シルフィード・ハクリオウ。よろしくね」

手を差し出すと、すぐに彼も立ち上がって、

「えと、ホリユウ・ユウジです。よろしく・・・お願いします・・・」

と言いながら、私の手を握ってきた。

「？」

その時、さりげなく魔力を測ってみたが、全く感じない。

（おかしいな？勘違い？）

不意にそんな不安が頭をよぎるが、気にしないことにした。

（私が間違えるはず無いしね）

かなりのポジティブシンキングである。

「あの、ここってどこなんですか？」

彼がそんな事を尋ねてきた。

「どこって、知らないの？」

「はい、気づいたらここにいる・・・」

「気づいたらって、何かあったの？」

「いや、なんか飛ばされたみたいで」

「飛ばされたあ？」

意味不明です。もしかして、頭うつたのかな？

「えっと、ここは、ハイグリード王国の「示現の森」だよ。一応

「はいぐりーど?」

「そうよ。まさか、知らないの?」

「いや、全く知らないんですけど・・・」

やっぱり、あたま打ったのかな?まさか……。考えをめぐらせていた時、いきなり、

「バァン!!」

と爆発音が響いた。

「何!?!」

「何だ?!」

私たちは二人で同時に外に飛び出た。

事件勃発！！

怪獣？ (雄二)

さっきからなんだろう？この人？。

何だ？ハイグリードって……。

お茶を飲みながら考えている俺。

(なんか、変な感じがするんだよなあ)

さっきから、何か考えるようにうつむいている青い瞳の女性。

(確か、シル……なんだっけ？なんか長ったらしい名前だったよ
うな)

頭から名前を搾り出そうとしていると、

「バァン！！！」

と爆発音が鳴り響いた。

「何だ?!」

「何!?!」

俺はシル……何とかさんのあとを追って、外に飛び出した。

青い髪を振り乱して辺りを見回す、

シル・・・、ああ、そうだ！シルフィードだ！！

俺がやっと思い出したとき、

「バキバキ」

と木が折れるような音がした。

その方向を見ると、金髪の少女が、くまのような怪物に襲われそうになっていた。

「誰かー助けて下さい」

今にも泣きそうな情けない声で、助けを呼んでいた。

その声はどこかで聞き覚えがあったが、どこだっけ？

また、俺が悩んでいると、シルフィードさんがいきなり俺の腕を取って、

「助けるわよ！」

と言いだした。

「あれからですか?!」

今、襲おうとしているのは、熊みたいな奴。

相手、長い爪、鋭いキバ〓武器所持。俺〓装備なし。

無理です。どうやっても無理です。

「早くしないと、あの子殺られちゃうわよ」

「そんな事言っても・・・」

躊躇していると、痺れを切らしたシルフィードさんが、頭に怒りマークをつけながら。

「いいから！早く逝く！！」

「ちょっと、字が違いますか！？」

後ろから、グイグイ押されながら前に進んで行く。

「私も手伝うから。それなら、大丈夫でしょ」

それを聞いて、少し安心した俺は、うなずいて、少女を救うべく走った。

今まさに、少女に熊が手を振りかざしているところだった。

「きゃあああああ」

悲鳴を上げて、うずくまる少女。

「やめろ、変体熊！」

勢いよく、熊に全体重で体当たりを食らわした。

熊は不意打ちに仰向けに倒れて、じたばたと動いていた。

「いつつつつ」

軽く頭をうってしまった俺は、頭をかかえながら立ち上がり少女に手を差し伸べた。

「大丈夫？」

「あ、はい。大丈夫・・・だと思えます」

少女は顔をあげて俺の顔をまじまじと見た。

（おわっ、また美人）

心の中で、その金髪の外人のような少女に驚いていると、

「なにしてんの？あんた」

と、ジトツとしたオーラが後ろにあった。

「何もしてないっすよ」

「そう、そんなことより、逃げないの？」

「あ、そうだった」

熊は、ゆっくりと起き上がっていた。

しかし少女は、俺の顔を見て立ち上がるうとしない。

「ほら、早く逃げるよー!」

「あの、さつきから、誰と話してたんですか?」

「へ?」

またわけの分からない事を言われた。

「誰って、さつきからそこにいる・・・」

と、さつきから突っ立っているシルフィードさんを指差すと、

彼女は俺の指差した方向を見て首を傾げると、

「誰もいないじゃないですか」

「へ?」

俺は自分でも思うほど素っ頓狂な声を出してしまった。

シルフィードさんに目で尋ねると、

「あとで、説明するから。今は逃げたほうがいいわよ」

そういって、シルフィードさんの指差す方向を見ると、熊が俺の真後ろに立っていた。

「やっぱ・・・」

熊が片手を振り上げたのが、見えた。

すかさず彼女をかばって前に飛んで熊と距離をとろうとした。

それと同時に、背中に激痛がはしった。そのまま、地面に倒れこんだ。

「きゃあああ、何するんですか。けだものですか？けだものなんですかね？」

「何、言ってるんだ。このやろう！」

俺はつつこみながら攻撃を食らった背中を確認した。背中赤く染め上げられていた。

「あつ、血が・・・」

「こんちくしょう、痛えんだよ、バカ熊が」

そういうと、熊はまた俺に攻撃をしようと手を振り上げた。

「シルフィードさん、お願いします」

「ええ」

俺はボーっと背中の中の傷を見ている、彼女を抱き上げて、立ち上がった。

「何、するんですか?!」

「さっさと逃げるんだよ」

そういつて俺は強く地面を蹴った。

すると、一気に熊から100メートルほど離れたところにいた。

「うあっ、早すぎねえ」

後方確認、熊はもう追いかけてこないようだ。

「ふう、もう大丈夫だろ。あのさ、どっちに行けばいいのかなあ?」

そう聞くと彼女は、顔を真っ赤にして縮こまっている。

「どうした?」

彼女は少し俺の顔を見て、

「早く降りしてください!」

と怒鳴られてしまった。何で怒られなくちゃいけないんだ……。。

なんだとおー！

なんですとお！ (雄二)

俺はゆっくりと彼女をおろし一息ついた。

彼女は俺の腕から降りると服のホコリをはらいジッと俺の顔を見てきた。

(しかし、かわいいよなあ)

「あの・・・、どうかしたか？」

そう尋ねると、彼女は首をかしげて、

「あー、前にどこかでお会いしませんでしたか？」

「はい？」

そんなことは無いはずだ、俺はこんな世界に来たことなんて無い。

「気のせいじゃないか？それより助かってよかったな。じゃね」

こういう人からは、経験上あんまり付き合わないほうがいい。

経験と言っても16年ほどだが・・・。立ち去ろうとした。

「ちょっと待ってください」

止めるのはいいが、服をつかむのはやめてくれ。俺は苦笑いをしながら振り返ると、

「あなた、もしかして違う世界から来たんじゃないんですか？」

「！」

いきなり、確信をつかれた俺は、少し動揺した。

「やっぱり、そうですか？」

俺は、ゆっくりうなずいた。後ろにいるシルフィードさんも驚いている。

「でも、なんで分かったの？」

俺は彼女にそう尋ねると、彼女は気まずそうに俺の顔から目線はずして、

「なんとなく、雰囲気違ったし、それに・・・」

俺はその後の言葉に、開いた口がふさがらなかった。

「この世界に、呼んだの。私ですから」

「・・・な」

シルフィードさんも、絶句してこの言葉だけは、そろってしまった。

「「なんですとお!」「」

またですかっ!!

またですか (雄二視点)

俺は彼女、さっき自己紹介された。

ミシル・アクリオの話によると、この世界に来てしまった時に聞こえた声は、

アクリオの声だったらしい。

「ミシルでいいです」

「・・・勝手に俺の心を読むなよ」

「声に出してましたよ」

「マジか!!」

いつもだ。大体、考えたことは意識してないと、口に出してしまう。

俺は大きいため息をついて、それた話題を元に戻す。

「それで、この世界に俺を呼んだってどういうことだ?」

「それは・・・」

彼女は琥珀色の瞳に少し陰を入れて気まずそうにしていた。

なんで泣く……。

「あの、それは明日お話しすることじゃあ、だめでしょうか」

「ん、……ああ」

俺はその目に負けた……。

後ろでシルフィードさんが、苦い顔をしていたが言ってしまったのだからしょうがない。

「ありがとうございます。それじゃあ」

少し笑顔を浮かべて、立ち去ろうとするミシルを呼び止め、

「ちょっと待ってくれ、俺は戻るのか？」

と一番気がかりなことを訊いた。ミシルは驚いていたが、

「それも、込みで明日ということぞ」

といい、

「それでは、また明日。じゃあ」

と行って、森の中に走り去った。

するといつの間にか隣に来ていたシルフィードさんが肩をたたいてきた。

「あんだ、ああゆう目に弱いよね」

「いや・・・、そうでもないと・・・」

ガスッ

「あたっ」

「うそ、言っな!..!」

たたかれた頭をさすりながら恨めしそうにシルフィードさんを見上げた。

「何よ・・・。それより今日はうちに泊まりなさい。話したい事もあるし」

「あ、はい」

俺はそう、短く答えて、シルフィードさんと歩き始めた。

（って、俺、今日ここにいなくちゃいけないのか・・・）

一抹の不安を抱きながら、もと来た道に戻っていった。

異世界・・・

異世界 (雄二視点)

どうなのかなあ、俺・・・。

「全く、あなたが異世界から来たなんてねえ」

いやっ、俺から見れば、こっちが異世界なんだけど。

いすに座って向かい合いあっている。

「そういえば、あいつは何で、シルフィードさんが、見えなかったんですか？」

「シルフでいいわよ。私の愛称で」

なんで、そんなにいらついているんだろう。

「そういえば、ちゃんとした私の紹介してなかったわね」

そういつて、立ち上がると少しステップを踏んだと思うと、ふわりと体が宙に持ち上がった。

「は？」

目の前の光景が信じられなかった。

空中をゆっくりと歩くシルフさんは、風のように俺の目の前に降り

立つと、

「私は、シルフィード・ハクリオウ。風の精霊です」

「……」

なにを言ってるんだ、そんなわけないでしょ。

内心笑っていたが、ついさっき、空中を歩く姿を、見てしまったことを思い出した。

「信じてないの？」

「……本当なんですか？」

その言葉に、少し驚いたようにしていたが、にこりと笑うと、

「本当よ」

とぼけっとしている俺の額を軽く小突いた。

「ええええええー!!」

この声は、心のそこから出た声である。

「っ、うるさいわねえ。いきなり大声出さないで」

「大声だして、当たり前ですよ。ありえないじゃないですか」

「こっちの世界では当たり前よ。まあ、確かに珍しいけど」

「うっ」

いきなり、風の精霊とかありえないだろ……。

なんなんだこの世界は。

「この世界って、一体なんなんですか？」

シルフさんは、静かな微笑をして俺を見つめると、

「メデイオン。……精霊と魔法が作りだす世界よ」

そう、彼女はつぶやくように言った。

無理やり契約

資格 (シルフィード)

この子、めずらしい力を持つてるのね。

「この世界って、一体なんなんですか？」

私は、少し意地悪なことを思いつき、少し笑うと

「メデイオン。・・・精霊と魔法の世界よ」

と言った。

「そんなことより、あなた。私が見えるのよね？」

雄二君は困ったような驚いたような顔で、

「ええ、まあ・・・」

彼はそう答えると、私の顔から目を背けた。

(私の顔のなにかついてるのかしら?)

少し顔をさわって何もついていないことを確かめると、

彼に向き直って、今考えていることを口にした。

「あのね、雄二君」

「はい」

なぜか、ビビッている雄二君は静かに答えた。

「私と、契約してみない？」

「は？」

意味が分からないように、彼は口を開いた。そりゃそうよね。

「それより、この世界について教えてもらえませんか？」

普通に正論な事をいつてきた雄二君。

「うーん」

私は、少し考えてこの機会を逃すのはもったいないように感じた。

(ここで、契約しないと後々暇よねえ)

私は、いままで100年ほど暇な日々を過ごしていた。

(そうだ)

「私と契約したら、細かく教えてあげるわ」

少しあくどい取引をつかったけど、まあ気にしない方向で……。

「えっと」

やっぱり、雄二君は戸惑っている。

「契約すると、なんかあるんですか？」

悩んでるのはそこか。

「別になんにもないわよ。ただ単に私の力を少し使えるようになりたり……」

「はあ」

「少し天気とかの影響を受けやすくなったりとか」

「へ？」

「霊体になった時、もしかしたら精霊になるかもしれないってくらいで」

「おい……」

「ん？」

「むちゃくちゃ、あるじゃないか!！」

「そう？」

「そうだろ。しかも、俺、異世界から来たんだぞ。

そしたらこっちに住まなくちゃいけないだろ!！」

雄二君は血相をかえて、一息で言つと肩を上下させて疲れたように私を睨んできた。

「フフツ、やっぱり雄二君おもしろいねえ」

「笑つてんなー!!」

これは、本気で動揺しているようだ。

「私と、契約したら。この世界で、何かと便利だよ」

「もう来ねえよ!」

そこまで、嫌か……。なら、しょうがないか、

「あーあ、ならしょうがないか。こつちの世界もいいものがあると
思うけどなあ」

「……」

かなり、落ち込んだように肩を落とすと、彼は少し気まずそうに黙
り込んだ。

効くかなあ、泣き落とし。

「せつかく、仲良くできる……と思ったのに……」

少し、涙ぐんで雄二君を見つめると、かなり動揺したようで元の世
界に戻ることに、

こちらの世界でしばらくの間生活することの天秤がこちら側へ傾いてくるのを感じた。

(やっぱり、女の武器は涙だなあ)

と、実感した。しばらく、待つと雄二君は、しびしび頷いた。

「じゃあ、早速契約しようか」

「ううう・・・」

彼はいまだに不服なようだ。

(まあ、気にしないでさっさと済ませよう)

そう思って、さっさと魔力をためていく。

私の周りに、風が吹き精霊が集まってくる。

「我、シルフィード・ハクリオウはかの者に誓おう」

ゆっくりと、出来るだけ間違えないように言っていく。

(あと、なんだっけ？まあ、いつか)

私は、彼の手の甲にそっと口をつけて、

「かの者に祝福あれ」

と言った。

私の周りの精霊が雄二君の周りについていく顔をあげると、

雄二君の顔が徐々に驚きに変わっていった。

私の髪をなでる暖かな風はいつ感じてても、とても心地よかった。

「久しぶりだなあ、この風」

契約の結果

契約の力（雄二）

「さあ、終わったよお」

「へ？」

いきなり、吹いてきた風がやんだと思ったたらいきなりシルフィードさんが言い始めた。

（以外に、すんなり終わった?!）

「痛　　!?!」

「あつ、そういえば、終わって少しの間。痛みが持続するから」

「それを、先に言え!?!」

「あー、タメ語使ったあ」

「知るかあ!?!」

雄二は、洒落にならない痛みをしばらく耐えていると、目の前に、小さな白い人間が現れた。

（なんだ、こいつ）

雄二は声にもならない声を、心の中で言った。

(っっていうか、マジ痛い)

と、考えた瞬間、頭の奥でバキンと何かが外れる音がした。

その瞬間、一気に痛みが引いていった。

「？、バキン？」

ヒロシは、ゆっくり立ち上がると、シルフィードの周りに小人が、フワフワと浮いていた。

「何？こいつら」

「ああ、この子達？風の妖精よ」

「はい？」

また、意味の分からない事を言い始めるシルフィードさん。

本当に意味が分からなかった。

「だから、この子達が、あなたのご友人になって私とかの手伝いをしてくれるのよ」

「はあ」

よく理解できない俺に、シルフィードさんはため息をついて、

「じゃあ、少し練習してみようか」

と彼女は一匹（一人？）を、手のひらにのせると、

「じゃあ、何か念じてみて。何でもいいから」

「え、はい。…」

「…」

いつまでたっても、何もおきない。

小精霊たちは、オロオロと困っているようだった。

シルフィードさんは、首をかしげて、不思議な目で俺を見ると、

「何を念じたの？」

と聞いてきた。

「いや、ちょっと火をおこしてくれと」

「…。出来るわけないでしょ」

そんな事を、言われて雄二は少し悩んで、もう一度、念じた。

今度は机の上の紙をとってくと、

すると、小精霊はにこりと微笑んで紙を3人がかりで持って、俺のところを持ってきた。

「おお、すごい。ありがとう」

そういうと、その3人は微笑を返してまたシルフィードさんのところに戻っていった。

しかし、一人が雄二の肩にちょこんと座った。

シルフィードさんは、得意そうに胸を張って、言うてくる。

「どっっ」

「いや、どっっって言うか。すごいとしか・・・」

「そんなもん？っていうか、頼む事しよばすぎなのよね」

そういつて、シルフィードさんは窓の近くによって、

外を見つめて肩に座っている小精霊を少しなでると、

小精霊は頷いてシルフィードさんが開けた窓から、飛び出していった。

「何するんですか？」

「いいから見なさい」

俺は黙って外を見ていると急に風が吹き始め、木を揺らし始めた。

そして、風が部屋の中を一気に駆け抜けた。

「うわっ！」

俺はその風に飛ばされて、壁に叩きつけられる。

「うぐっ」

「これぐらい、耐えなよ。弱っちいなあ」

(今の台風くらいの風だったぞ)

心の中でぞうつぶやく、それより、声が出なかった。

「まあ、こんなことも出来るのよ。慣れればね」

ケラケラと笑いながら、俺に言ってくるシルフィードさんだった。

契約の結果（後書き）

受験なので、しばらく休ませていただきます。
すみません。

夜

翌日^{ミシル}

(まさか、あんなところに居るなんて)

その後、私は、家に戻り考えていた。

「確か、名前は…」

その時、私は重大なことに気がついた。

(名前・・・聞いてなかった・・・)

私はいつもこういうのだ。何かを忘れてしまうのだった。

「まあ、明日あの場所に行けばいいのよね」

そう、自分に言い聞かせ座っていたイスから立ち上がる。

「ミシル。ご飯よ」

「はい」

お母さんが呼んでいた。私は、部屋を出てリビング格に向かう。

私の魔法はお母さんには、黙っている。

お母さんは、普通のセミレント(魔法が使えない人)なのだ。

私たちの地域では、ルイレント（魔法を使える人）は、どこかに連れて行かれてしまう。

（私は、母さんの所を離れるわけには行かないの…）

この魔法が、分かったのは2日前。

いつものように、水汲みをしようとしてちょっと遠回りしたらグレズリー（熊の怪物）に

襲われて、つい使ってしまった。

（もう、こんなことしないようにしなきゃ）

私は、ずっとお母さんのそばについていなくちゃいけないから。

お父さんは、ルイレントでどこかに連れて行かれてしまった。

お母さんはそのショックで、しばらくの間、昏睡状態で入院することになってしまった。

その後、お父さんはまだ帰ってこない。

（あの人を、もとの世界に帰してそれで終わり）

そう決意して、私はリビングに続く扉をくぐった。

「やっときた」

そついつ言葉と共に、いつも通りの笑顔を浮かべるお母さんの顔を
見ながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8833d/>

異世界・メディオ

2010年10月10日16時27分発行